「男らしい」男性顔に対する選好と愛着スタイルの関連性

○高橋 翠¹

(¹ 東京大学大学院教育学研究科)

キーワード：顔魅力、「男らしさ」、愛着スタイル

Attachment style predicts the preference for male facial masculinity.

Midori Takahashi¹

(¹ Graduate School of Education, the University of Tokyo)

Key Words: facial attractiveness, masculinity, attachment style

目的

男性顔において「男らしさ」が知覚される容貌は知覚者にとって脅威刺激である。実際に「男らしい」容貌の男性顔は、無表情でも怒りが認知され、攻撃的/支配的という印象が与えられやすい(例 Oosterhof & Todorov, 2008)。これは、持ち主が身体的に強靱であることの手がかり(Fink et al., 2007)であることに起因する(例 Sell et al., 2008)。それゆえ、たとえ「男らしさ」が知覚される男性の容貌は女性の繁殖に寄与する望ましい資質の手がかり(Thornhill & Gangestad, 1999)であっても、保身に対する脅威性が覚知される；恐怖感情が経験される場合、魅力の知覚は抑制される(高橋・遠藤、投稿中)。高橋(2012 年度認知心理学会大会発表予定)では、無表情・直視条件の男性顔写真に対する魅力評定時に、以下 2 種類の文脈情報：①男性が人間関係上のトラブルに起因する苛立ち(怒り)の矛先を評定者に向ける可能性を示唆する文章(脅威条件)、②男性が社会的正義に基づく義憤を原因人物(他者)に向けていることを示す文章(非脅威/義憤条件)いずれかを呈示した。その結果、②非脅威/義憤条件のみで、より「男らしい」男性顔の方が比較的中性的な男性顔に比べて魅力的と評価された。ただし、当該状況下で評定者に敵意が向けられていない場合でも、男性顔における「男らしい」容貌は依然として保身リスクの存在を示唆する手がかりである。

個人の愛着スタイルは、自己と他者に関する信念から構成される。このうち、危機に陥った際に他者が自身に保護や援助を提供してくれるかどうかということに関する予期や期待(他者観のポジティブ/ネガティブさ；中尾・加藤, 2004)は、「男らしい」男性顔の魅力評定における文脈の効果に影響を与えるかもしれない。すなわち、脅威が顕在化していない非脅威条件であっても、ネガティブな他者観(他者は援助的でないという信念)をもつ女性は、保身リスクを高く見積もるために、他者観がポジティブな女性とは異なり、文脈情報が男性の敵意のなさを明示している場合でも、配偶者として優れた資質の手がかりをもつより「男らしい」男性顔を、中性的な男性顔に比べて魅力的と評価することがない可能性がある。

方法

写真刺激 高橋・遠藤(投稿中)で使用した 65 名の男性顔のうち、魅力と「男らしさ」の評定値のマッチングが行えた 12 ペア 24 枚の顔写真(無表情・直視)。6 ペアは「男らしさ」の評定値が平均以下、残り 6 ペアは平均以上。写真は顔部分のみ呈示。モノクロ印刷。

調査票の構成 各男性顔写真の上に、以下の文章いずれかを呈示した。顔写真の評定は 1[全く魅力的でない]~7[とても魅力的]までの 7 段階(方法の詳細は高橋, 2012 参照)。

写真評定後 性別・年齢・性的指向性、一般他者に対する愛着スタイル(中尾・加藤, 2004；全 30 項目)に回答させた。

調査対象者 全項目に欠損がなく、性的指向性が男性であった女性 90 名(19 歳~25 歳；平均 20.12 歳, $SD=0.92$)。

手続き 大学講義中、調査票に個別回答させた(約 15 分)。

結果と考察

「男らしさ」群別に、脅威/非脅威条件の魅力評定値の平均点を算出した。次に、愛着スタイル尺度(中尾・加藤, 2004)のうち、他者観の測定にあたる下位尺度(親密性回避)の 12 項目の平均値によって回答者を 2 群に割り当てた：親密性回避得点低群 $N=43$ (他者観がポジティブ)、高群： $N=47$ (他者観がネガティブ)。独立変数を「男らしさ」(2：高/低)、文脈条件(2：脅威/非脅威)、他者観(2：高/低)、従属変数を魅力評定値とする分散分析を行ったところ、「男らしさ」 $F(1, 88)=5.97$, $p<.05$, 条件 $F(1, 88)=29.05$, $p<.01$ の主効果、「男らしさ」と親密性回避の交互作用が有意だった $F(1, 88)=5.47$, $p<.05$ 。多重比較 Bonferroni の結果、親密性回避の低い群では脅威・非脅威条件に関わらず、中性的な男性顔に比べて「男らしい」男性顔を魅力的と評価していた ($p<.01$)。「男らしさ」・条件・親密性回避に二次の交互作用は認められなかったが、「男らしさ」と条件の交互作用がわずかに 10%水準に届かなかったため ($p=.11$)、親密性回避群ごとに魅力評定値に対する「男らしさ」と条件の効果を検討した。その結果、親密性回避高群(ネガティブな他者観)では、各条件(脅威・非脅威)で「男らしさ」高群・低群の間に魅力評定値に違いがなかった。その一方で、親密性回避低群(他者観がポジティブ)では、非脅威条件で「男らしい」男性顔の方が中性的な男性顔に比べてより魅力的と評価される傾向にあり ($p<.01$)、非脅威条件でも有意傾向ではあるが同様の傾向性が認められた ($p<.10$) (Figure1)。他者観がポジティブな女性でのみ、非脅威条件で「男らしさ」高群の男性顔が有意に魅力的と評価されるという結果は仮説を部分的に支持する。今後は、愛着における他者観以外に保身リスク(およびその見積もり)に関わる他の要因が「男らしい」男性顔の選好に影響を与えるか、更なる検討が必要であろう。

Figure1

** $p<.01$, + $p<.10$

魅力評定値に対する「男らしさ」・文脈・親密性回避の効果